

自然エネルギーが開く未来

インタビュー

足るを知る社会へ 地産地消の電力が 自治再生のカギ

7月から自然エネルギーの固定価格買取制度が始まる。東京電力福島第一原発事故を受け、「脱原発依存」に向けた具体的な一歩だが、話は電源選択の問題にとどまらないようだ。何がどう変わりうるのか。岐阜市中心部から車で2時間、山あいの過疎地で一足先に、水車で起こした電気地域再生に取り組み平野彰秀さんに会いに行った。

「ここは水が豊かですね。川から、農業用水路から、集落のどこにいてもせせらぎが聞こえてきます。そうでしょう。石徹白(岐阜県郡上市)は、日本三名山のひとつ、白山の南麓の集落です。古来、人々は流域を潤し、暮らしを支える水の源・白山を「水女神」としてあがめてきました。石徹白はその信仰の重要な拠点。江戸時代には神に仕える人が住む村として、この藩にも属さず、独特の文化と自治が成立していたそうです」

「しかし戦後の高度成長の波が、地域の特性をすっかり覆い隠してしまっただ。若者は明日の豊かさを夢みて『こんな山奥なんてはたまたま』と都会に出た。そして50年がすぎ、人口は約4分の1に減り、地区唯一の小学校は全校児童12人。過疎と高齢化に悩まざりふれた農村のひとつになってしまっています」

「NPOの一員として2007年から水車を使った小水力発電を推進してきたそうですね」

「地域をなんとか再生させたい」という石徹白の方々の切実な願いにこたえたかった。昭和30(1955)年ごろまでは水車があり、昼は製材所の動力に、夜は集落の電気に使っていたそうだから、温故知新で地域再生のシンボルにしようかと」

「昨年3月、実働機としては三つ目の水車を設置し、電気代の負担が重くて休眠していた農産物加工所に電気を送っています。息を吹き返した加工所では夏場、特産品のトウモロコシのハネ品を使ってパウトターをつくり、半年間ですが、パート数人の雇用が生まれました。水が流れる限り、24時間365日コツコツ発電できるのが、小水力の利点です。将来的には売電も考えています」

「地元的女性有志が特産品を使うたカフェを定期的を開くなど、水車は地元の人々の意識を動かす始めています。小水力発電の見学などをきっかけに昨年、4世帯9人が移住。うち1世帯は私と妻で、築130年の古民家に住んでいます」

「経歴は見事なエリートっぷりで、コンサルタント時代は年収1千万円を超えていたと。それがなんでまた? と問われるのですが、社会の線から降りたとかははずれたつもりは全くありません。時代の流れは『こっち』だと思ってますから。感覚的にはメンチャアの起業家とそう変わらないかもしれない」

「失われた20年」で喪失したものを取り戻そうと躍起になっても、もう無理でしょう。経済成長を前提にした社会モデルに固執するのはやめて、次の社会モデルを準備した方がいい。日本が次にめざすべきは『足るを知る』社会であり、地域の特性を生かした地産地消型の自然エネルギーがカギになると思います」

「石徹白は、まさにそういう社会だったんですね。豊深く、隔離された集落なので、食べ物はもちろん、衣服や道具類も手近な材料でつくってきた。そして雪解けの春を迎えるころ、『いいお天気ですね』とあじさつすると『ありがたないなあ』と返ってくる。自の手で暮らしをつくるからい。『足るを知る』ことが出来る。そんな地域の知恵と精神性をもとに、次の時代の社会モデルを実現させたいです」

「大きくてましたね」

「いえいえ。かつては日本の農村のあちこちに、村営や民営の小水力発電所があったんですよ。戦争中、電力は国家が管理し、戦後、地域独占の形で民営化された。敗戦後の焦土を早急に復興させるにはシステムを集約し、権限を集中させた方が効率的でしたが、いまはむしろリスクに投資している。原発事故とその後首都圏の混乱が、それを証明していると思います」

「高度化する現代社会は巨大なシステムが複雑に絡みあい、自分の生活がどう成り立っているのか、命の根っこがどこにつながっているのか、みえなくなっています。原発事故が起きて初めて、福島でつくられた電気が東京に送られていたことを

あきひで 彰秀さん ひらの 平野

NPO法人「地域再生機構」副理事長

75年生まれ。岐阜市出身。東京大大学院修了後、外資系コンサルティンク会社を経てUターン。石徹白地区地域づくり協議会事務局も担う。



知った人は少なくないでしょう。私たちはシステムに自動的に組み込まれてしまうから、管理・運営への責任感や主体性は当然育まれません。平時は『誰か』に全くのお任せだし、問題が起きると『誰か』に文句をいう。文句をいって留飲を下げたり、不安を紛らわしたりするしかできない人が大多数の社会は危うい」

「だから自然エネルギーだとか?」

「僕は自然エネルギーの普及だけを目標にしているわけではありませんが、より重要なのは、自分たちの手で、自分たちの暮らしをつくっていくという自治の精神、石徹白の人がよく使う言葉を借りれば『甲斐性』を取り戻すことです。地域の特性を生かした地産地消型の自然エネルギーが普及すれば、私たちの意識が変わる。問題が起きたら、自分たちでどうにかするしかないのですから」

「たとえば石徹白の水車は、羽根に地元の杉材を使い、地元の人がメンテナンスします。ゴミが詰まると



「ジャケットとシャツは自然素材にこだわった妻の手作り。自宅で洋品店を営んでいます」

岐阜県郡上市白鳥町石徹白、細川卓撮影

水がうまく流れなければ、気づいた人が取り除く。自然エネルギーは、自治再生のとてもよい教材です。『おまかせ民主主義』といわれるような政治のあり方を変えていくきっかけにもなると思います」

「『経済成長』はある世代以上にとつては金科玉条のごときものようにですが、平野さんの世代は?」

「僕が大学に入ったのはバブル崩壊後の94年。経済成長といわれてもピンとこない。下の世代はもっとそうでしょう。国内市場が縮むなか、いま行われているのは、途上国に市場を求め、先進国化させていくゲームですよ。日本はそんなことに血道をあけるより、経済成長しなくても豊かに暮らせる社会をどうつくるかを考えるべきです。アジアはかつて、奇跡的な経済成長を遂げた日本を手本にした。だから今度は、成長を終えた国がどううまく持続可能な社会を築くのか、範を示すのです」

「豊かすぎて何ですか。」「信頼できるコミュニティ、人とのつながりがあって、お金に頼りすぎずに生きられることです。身近所で融通しあったりする『おすそ分け』の経済があった方が安心でしょう。お金をたくさん稼がなきゃ生きていけないという強迫観念があるから、みんなが利己的になる。経済成長しない福祉を担えない。国はいいますが、共助代替できる部分は少なくない。『独り占め』から『おすそ分け』へと価値観を転換させる必要があるし、若い人たちはすでに転換しようと思っています」

「文明を転換させるべき時だ」という考えはよくわかりました。とはいえ、そんなのは夢物語だと受け取る人も多いでしょうね」

「そうですね。コンサルタント時代の同僚に『自給自足の推進は経済を衰退させる。分業し効率化するから経済は成長するのだ』と批判されたことがあります。僕もビジネスの世界にいましたから、彼の言い分もわからないではありません。しかし分業を進めた結果、命に直結する一次産業が衰退する一方で、なくなっても困らないような表面的な仕事ばかりが増えている。そんな社会が果たして長続きするのでしょうか。エネルギーや資源、食の課題を長期的視点で考えれば、夢をみているのはとっちらかっている気がしません」

「60年代の高度成長期、既成の社会や価値観からの離脱をめざすヒッピーがブームになりましたね。お会いする前は、平野さんは現代のヒッピーだと思込んでいました」

「もっと切実だし、ある意味、悲壮ですよ。巨大で掃るきない体制があればこそ、逃走や離脱というスタイルが成り立つ。いまは体制そのものがグラグラですから、逃げてもし方がいい。僕らや、若い世代が、新しくつくるしかないと思います」

「聞き手・高橋純子」